

## 終助詞「ヨ・ネ・ナ・カ」の組み合わせ

—出現頻度から考える—

### The Combinations of Sentence Ending Particles “yo” “ne” “na” “ka” in Japanese Language —A Study of the Japanese Unique Communication Style—

池田 英喜\*

IKEDA, Hideki

---

Some sentence ending particles in Japanese language are often used as combined forms; for example “yo-ne” “ka-na”. Sentence ending particles are communicative particles. They add particular meaning or nuance to the speaker’s utterance, where grammatical ones function more as glue between words in a sentence. Since sentence ending particles “yo”, “ne”, “na” and “ka” are communicative particles rather than grammatical ones, they are normally used in dialogue.

However, I draw conclusions that some of the sentences appearing in dialogue seem to have a feature of a monologue rather than dialogue, even when spoken in front of the person to whom one is talking. This fact shows the unique characteristics of Japanese communication style.

---

キーワード 終助詞、対話系発話<sup>1</sup>、独話系発話<sup>2</sup>

#### 要旨

終助詞の「ヨ」「ネ」は他の終助詞と組み合わせて用いられることが多い。その際の使用頻度にはかなり偏りがあり、その偏りは日本語の独特のコミュニケーションスタイルに起因する。そのコミュニケーションスタイルとは、聞き手が目の前にいるにも関わらず、直接聞き手に向けては発話せず、まるで独り言のように発話するというものである。しかし実際には、聞き手がその発話を聞いていることを想定し、願わくば話し手の発話に同意して欲しいという、かなり複雑なコミュニケーションスタイルを日本語は持つことを本稿では示す。

---

\* 新潟大学国際センター

<sup>1</sup>：聞き手に聞かれていることを、話し手が想定した上での発話を対話系発話とする。

<sup>2</sup>：必ずしも聞き手に聞かれていることを想定しない話し手の発話を独話系発話とする。「聞いて欲しいけど直接言うのははばかれる」という発話も独話系発話として扱う。

## はじめに

日本語学習者は、学習のかなり早い段階で、終助詞「カ」を疑問文を作るための必要不可欠な文法事項として学習する。一方で同じく終助詞「ヨ」「ネ」はある程度学習が進んだ段階で、初めて文法事項として提示される。「ナ」にいたっては、中級レベル以上で初めて「いいお天気だなあ」といった感情の表出の一部として紹介されるにとどまる。

このように学習のいろいろな段階で、いわばバラバラに紹介され、指導されている文末の助詞を、日本語の使用実態から見て整理し、日本語における、ある種ユニークなコミュニケーションスタイルを学習者に提示できるようにしたい。

## 先行研究

### 森山・安達（1996）

「ネ」と「ヨネ」に分けて、学習者向けに整理して提示している。以下に引用するが、番号は池田が付したものである。

「ネ」:

- ① 聞き手も自分と同じ意見だと思われること、聞き手もすでに知っていると思われることを持ちかけ、確認する。会話の現場にあることがらについて、聞き手に持ちかけ、同意を求める。
- ② 聞き手に直接関わる情報を持ちかけ、確認する。
- ③ 聞き手から尋ねられたことに対して、記憶を思い返したり、よく考えたりして答えていることを示す。

「ヨネ」:

- ① 聞き手もそう思っていると考えられることがらを確認する。
- ② 目の前にあることや自分の記憶では聞き手も当然知っていると考えられることを確認することができる。
- ③ 聞き手もそう思っているだろうと見込まれても、本当はどうか分からない場合には「ヨネ」は使えない。このとき、「ネ」は使える。
- ④ 「ヨネ」は、「ネ」のように自分の記憶などで確認したことを表すことができない。

### 益岡（1991）

話し手が聞き手に情報の要求を行うのは、原則として、聞き手の知識が話し手の知識を上回っていると想定される場合においてである。として、話し手と聞き手、両者の存在を前提に述べた上で、「ネ」と「ヨ」は話し手と聞き手の内部世界のあり方の一致性、対立性を表す形式であると結論付けている。

### 宮崎 (2002)

独話と対話に分けて、「聞き手目当ての有無」と「文体的特徴」の2方面から「ネ」と「ナ」を整理している。「ネ」は対話的に用いられ、常に聞き手目当て性を有すると結論付けている。聞き手目当て性が無いというのは、独話として用いられるということであり、基本的に「ナ」はこの用法で用いられる。ただし、「ナ」には対話的に用いられる場合があり、その際には、男性語的（ぞんざい）に用いられるという文体的な特徴を持つとしている。

また、「カナ」は独話性の疑問形式であり、その使用に男女差といった文体的特徴はない。「ヨナ」は「ヨネ」の男性語的なものと捕らえている。

### 考察

「カ」が出現する場合、話し手は自分の持つ情報に確信が持てない、あるいは情報自体を持たないことを示す。テレビのサッカー中継を見ていて、

#### (1) 「ここで香川を投入するか」

と独り言を言う場合、「香川を投入する」という事態が信じられない、自分の予想していた展開とは違うというニュアンスを示す。独り言なので、「カ」を用いていても誰に問いかけているわけでもない、疑問文とはならない。従来「カ」は疑問を意味する終助詞とされるが、そもそも「カ」自体にはそのような意味は無く、話し手の情報に対する確信のなさを表すという機能だけがあって、それが対話の中で用いられる場合に、結果として疑問を表す形として認識されるだけなのではないかと考えられる。

続いて「ヨ」は、話し手が自分の持つ情報を他者に向けて発信する際に用いる。ただし、聞き手の存在を意識しながらも、その意向・判断が話し手のそれと同じであるかどうかは一切問わない、もしくは問題にしない。例えば、馴染みの喫茶店を出るときに、

#### (2) 「明日も来るよ」

と言っても、相手は必ずしもそれに答える必要はない。話し手が一方的に宣言しているに過ぎない。

最後に「ネ」もしくは「ナ」によって、聞き手の存在をどの程度意識しているかを示す。「ネ」の場合、話し手が自分の情報と聞き手が持っているであろう情報が同じであることを前提として発話する。一方「ナ」の場合は、聞き手の存在を意識しないで、話し手が話し手自身に向けて発話している。

「カ」の有無で情報に対する確信の有無を示し、「ヨ」の有無でそれを一方的に聞き手に投げかけるか否かを決め、最後に「ネ」もしくは「ナ」で、話し手が提示した情報に対して聞き手に反応を示して欲しいかどうかという意思表示をする。つまり、話し手はまず情報そのものに対する話し手の姿勢を示し、続いて聞き手に2段階でその情報の受け渡し方を示していると言える。

本稿では、終助詞「ヨ」「ネ」「ナ」「カ」とその組み合わせについて、まず「ナ」と「ネ」の対立として捕らえ、「ナ」を独話系、「ネ」を対話系として整理する。なお独話系というの

## 終助詞「ヨ・ネ・ナ・カ」の組み合わせ

は、発話の場に聞き手がいるかいないかは関係なく、いわば話し手が聞き手の存在を無視した形で発話するものである。一方対話系というのは、発話の場に聞き手がいることを想定し、聞き手の存在を必ず意識して発話するものである。

対話系、独話系それぞれについての組み合わせは以下の表のようになる。

対話系： 聞き手の意向・判断に配慮する。 必ず聞き手がいる。			
カ	φ	φ	…か。
カ	φ	ネ	…かね。
φ	φ	ネ	…ね。
φ	ヨ	ネ	…よね。
φ	ヨ	φ	…よ。

独話系： 聞き手の意向・判断に配慮しない。 聞き手が不在である必要はない。			
カ	φ	φ	…か。
カ	ヨ	φ	…かよ。
カ	φ	ナ	…かな。
φ	φ	ナ	…な。
φ	ヨ	ナ	…よな。

### 組み合わせごとの出現頻度の対比

対話系の助詞の組み合わせでは、情報に確信を持ちながら聞き手に同意を求めるような「ヨネ」のほうが、確信のないままに同意を求める「カネ」よりも出現頻度が高いと考えられる。自分の意向・判断をより確固たるものとするために、聞き手のサポートを積極的に受けようとするためと考えられる。「カネ」より「ヨネ」のほうが聞き手に同意を要求する度合いがより強いと言えよう。実際の使用例でも明らかに「ヨネ」の出現例のほうが多い。

対話系		
出現予想	カネ < ヨネ	
実際	カネ (1) < ヨネ (19)	合計 20例
同意要求の度合い	弱い ← 要求 → 強い	

一方、独話系の場合は情報に対する確信の度合いが低いがゆえに、独話の形のままでありながら、聞き手に向けて発信することで、聞き手からのサポートを得てその情報を確認しようとする「カナ」が「ヨナ」の出現頻度を上回ることが予想でき、果たしてそのとおりの結果となった。

独話系		
出現予想	カナ > ヨナ	
実際	カナ (104) > ヨナ (49)	合計 153例
確信の度合い	低い ← 確信 → 高い	

#### テンス形式との共起による出現確率

予想では、「タ」形は過去、もしくは完了事態を表すので、話し手は事態成立に確信を持っている可能性が高い。つまり、「タ」は情報に確信がもてないことを示す「カ」より、情報に確信を持ち、聞き手の意向・判断とは無関係に一方的に提示しようとする「ヨ」と共起し出現する確率が高いことが予想できる。予想と実際の出現頻度を以下の表に示す。

出現予想	タヨナ・タヨネ > タカナ・タカネ
実際	タヨナ (11)・タヨネ (4) < タカナ (17)・タカネ (0) 15 : 17

予想に反して、タ形と「ヨ」「カ」の共起の出現頻度にほとんど変わりはない。タ形での発話と言うのは、それだけ話し手が事態の出現・成立に確信を持って発話するのだと言える。事態がすでに出現・成立し、それに対して話し手が確信を持っているならば、何もわざわざ聞き手に同意を求めるまでもない。つまりそもそも「ナ／ネ」と共起する必要がないと言える。事実、「ナ／ネ」と共起しない「タヨ」の出現度数を調べると、以下ようになった。

タヨ (61) > タヨナ・タヨネ・タカナ・タカネ (31)
--------------------------------

一方「ル」形は未来、もしくは未完了事態を表すので、話し手は、事態成立の可能性を述べるに過ぎない。つまり不確実な事態（ル形）に話し手の情報に対する確信のなさを示す終助詞「カ」が続く形式のほうが、情報に対する確信「ヨ」を示す形式よりも共起し出現する可能性が高いことが予想できる。

出現予想	ルヨナ・ルヨネ < ルカナ・ルカネ
実際	ルヨナ (6)・ルヨネ (13) > ルカナ (9)・ルカネ (0) 19 : 9

実際は予想とはまったく逆で、未来もしくは未完了の事態について、確信を持って聞き手に提示しながら、同意を求めるという形のほうが出現頻度が高かった。これは話し手の自信のなさの現れではないかと思う。未来もしくは未完了の事態に対して、そもそも確信を持つということができないはずである。ただ話し手としては、その事態の実現を強く求めるあまり、「ヨ」と共起させて述べたいのだろう。話し手は自らの意向・判断に対して時には強く（「ネ」を用いる）、また時には弱く（「ナ」を用いる）聞き手からのサポートを得ようとすることで、安心しようとするのではないだろうか。

ただ、「ルカネ」は文体的に少し古い感じを受けるので、若者だけが登場するドラマのシナリオでは、当然その出現頻度は低くなると考えられる。

次節では、さらに細かく対話系、独話系それぞれにおけるタ形と共起した場合とル形と共起した場合に分けての出現頻度を確認しておく。

### 対話系での対立

「ヨネ」「カネ」の対立は以下のとおりであった。

対話系	タヨネ (4) < ルヨネ (13)	17例
	タカネ (0) = ルカネ (0)	

「ヨネ」では、タ形よりもル形との共起のほうが多く出現した。これは不確定事態の出現に、話し手自身は確信を持ちながらも、聞き手に同意を求めようとしていることが多いことが読み取れる。

### 独話系での対立

「ヨナ」「カナ」の対立は以下のとおりであった。

独話系	タヨナ (11) > ルヨナ (6)	43例
	タカナ (17) > ルカナ (9)	

確定している事態に対して、話し手に確固たる確信がないことを表す、「タヨナ／タカナ」の両形が、不確定な事態に対して確信がないことを表す「ルヨナ／ルカナ」の両形よりも明らかに出現頻度が高い。これは、実際にすでに起こった事態について、話し手自身の中に確信が持てない場合に、独話の形で聞き手にそれとなく同意を求めようとしている話し手の気持ちの表れではないだろうか。しかし、直接はっきりとは同意を求めにくいという話し手の、いわばプライドのようなものが伺える。仮にうまい具合に聞き手から同意を得られれば、自分の中の不安要素が消えることになる。

### 対話系対独話系

以上対話系と独話系に分けてそれぞれの中での対立を見たが、結果的に非常に興味深いのは、それぞれの出現数の総計の比較である。今回はわずか1つのドラマのシナリオからそれ

ぞれの形式の出現例を見ただけなので、いきなり一般化することは少々乱暴ではあるのだが、実際には明らかに他者との会話の中での発言でありながら、独話系形式を用いての話し手の発言のほうが明らかに出現数が多い（対話系：独話系＝20：153）ことである。本当は相手に聴きたいことがあるにも関わらず、そして自説について聞き手から同意を求めたいにも関わらず、直接聞き手に同意を求めようとしないという点が浮き彫りにされたといえよう。これは、いかにも日本的なコミュニケーションのスタイルを表していると言えないだろうか。

## まとめ

対話系の発話と独話系の発話という見方を取り入れて日本語の会話を分析すると面白いことが見えてくる。「会話は対話である」という当たり前の発想からだけでは日本語によるコミュニケーションの本当の姿が見えてこないかもしれないと、本稿の考察を通して得た実感である。

また、データを整理、考察中にさらにもう一点面白いことに気づいたので、本節に記しておきたい。それは対話系の発話時と独話系の発話時の目線の違いである。実験して確認したわけではないので思いつきの域を出ないが、対話系、つまり「ヨネ／カネ」を使うとき、話し手は、比較的聞き手の目を見て、相手に訴えかけるように話しているように思える。一方独話系、つまり「ヨナ／カナ」を使うときには、極力聞き手と目線を合わせないようにして発話しているのではないだろうか。特定の言語形式と発話時の目線というのは、これまでにそういう研究がなされていないとすれば、今後面白い研究テーマになるかもしれない。

脱線したが、以下に本稿での考察を表にまとめておく。

対話系	「ヨネ」（とくに「ルヨネ」） 話し手にとっては確信の持てる情報だが、聞き手にも同意して欲しい。
独話系	「カナ」 話し手にとっては確信の持てない情報だが、面と向かって聞き手に同意を求めにくいので、独話の形で発話することで、それとなく同意を求めたい。

## あとがき

日本語の文法現象を正確に記述することは研究者としては当然のことである。しかし、その研究成果をどう生かすかという観点が、日本語教育の現場においては圧倒的に欠落している。これは、言語事象をあるがままに記述しようとする研究者と、言語をできる限り効率的に学習者に提供しようとする教授者を繋ぐ、橋渡しの存在が軽視されてきたためであると言わざるを得ない。研究者は研究内容で評価され、教授者は教育場面で評価される。しか

し、その両者を繋ぐ者は、今のところ研究者でもなく教授者でもないどっちつかずの存在として、評価に値しない。言い方が悪ければ、評価できないとしてもよい。結果として何十年も前にスタンダードであった文法事項をしかたなくそのままの形で学習者は教わり続けるという事態を生んでいる。

これまでに多くの研究者の手で記録されてきた様々な文法現象を、実際に日常的によく使うものについて整理をすることで、これからの日本語学習者には大きな恩恵をもたらすことになる。その意味において、文末に現れる助詞を学習者が使い分ける際に、単なる形式と意味ではなく、その背後にある日本的発想・思考となるものを、大まかにではあるが、本稿では示すことができたのではと思う。

### 参考文献

- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』、くろしお出版  
松丸真大（2007）「関西地方のヤンナとヨナ」『阪大日本語研究』19号、大阪大学日本語学研究室  
宮崎和人（2000）「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106号、日本語教育学会  
宮崎和人（2002）「終助辞「ネ」と「ナ」」『阪大日本語研究』14号、大阪大学日本語学研究室  
森山卓郎・安達太郎（1996）『セルフマスターシリーズ・助詞』スリーエーネットワーク

### 資 料

- 柴門ふみ原作／坂元裕二 脚本 『東京ラブストーリー TV版シナリオ集』（1991）小学館